



学生・教員が共に成長する初年次教育の取組 —「SIH道場～アクティブ・ラーニング～」の実施とその成果—

1. 全学的な初年次科目の推進

「SIH道場～アクティブ・ラーニング入門」

Strike while the Iron is Hot. 「鉄は熱いうちに打て」

徳島大学の全学的な初年次教育プログラム

文部科学省平成26年度「大学教育再生加速プログラム (AP)」、テーマI「アクティブ・ラーニング」に採択

- ◆ 1年次生全員が受講 (平成27年度～)
- ◆ 授業内容: 学部/学科/専攻/コース単位で設計 (全16教育プログラム)
- ◆ 担当教員: 学部・学科教員
- ◆ 授業支援: 高等教育研究センター教育改革推進部門 学修支援部門EdTech推進班 SIH道場コンテンツ作成WG

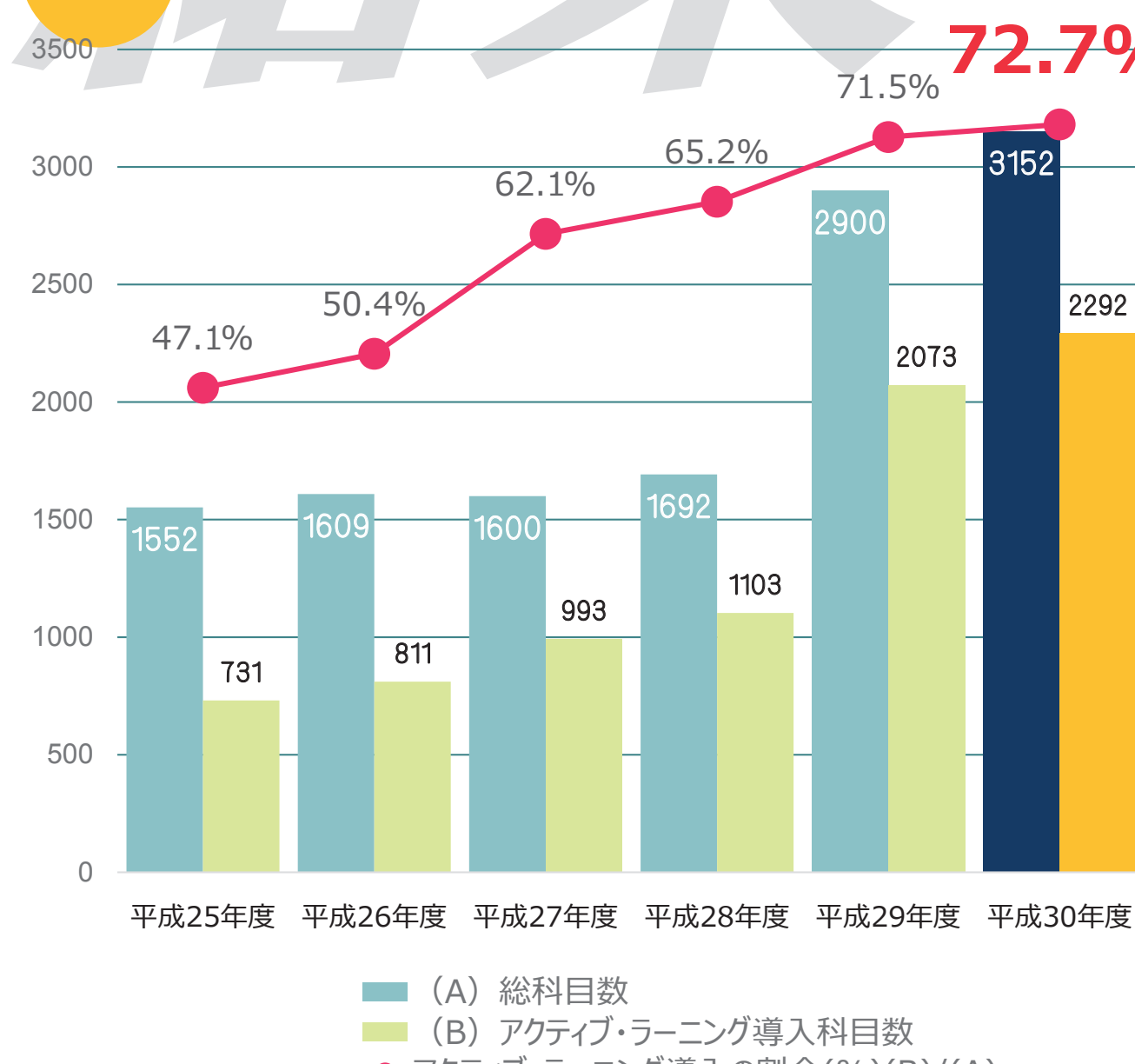


向井将馬・塩川奈々美・吉田博・川野卓二

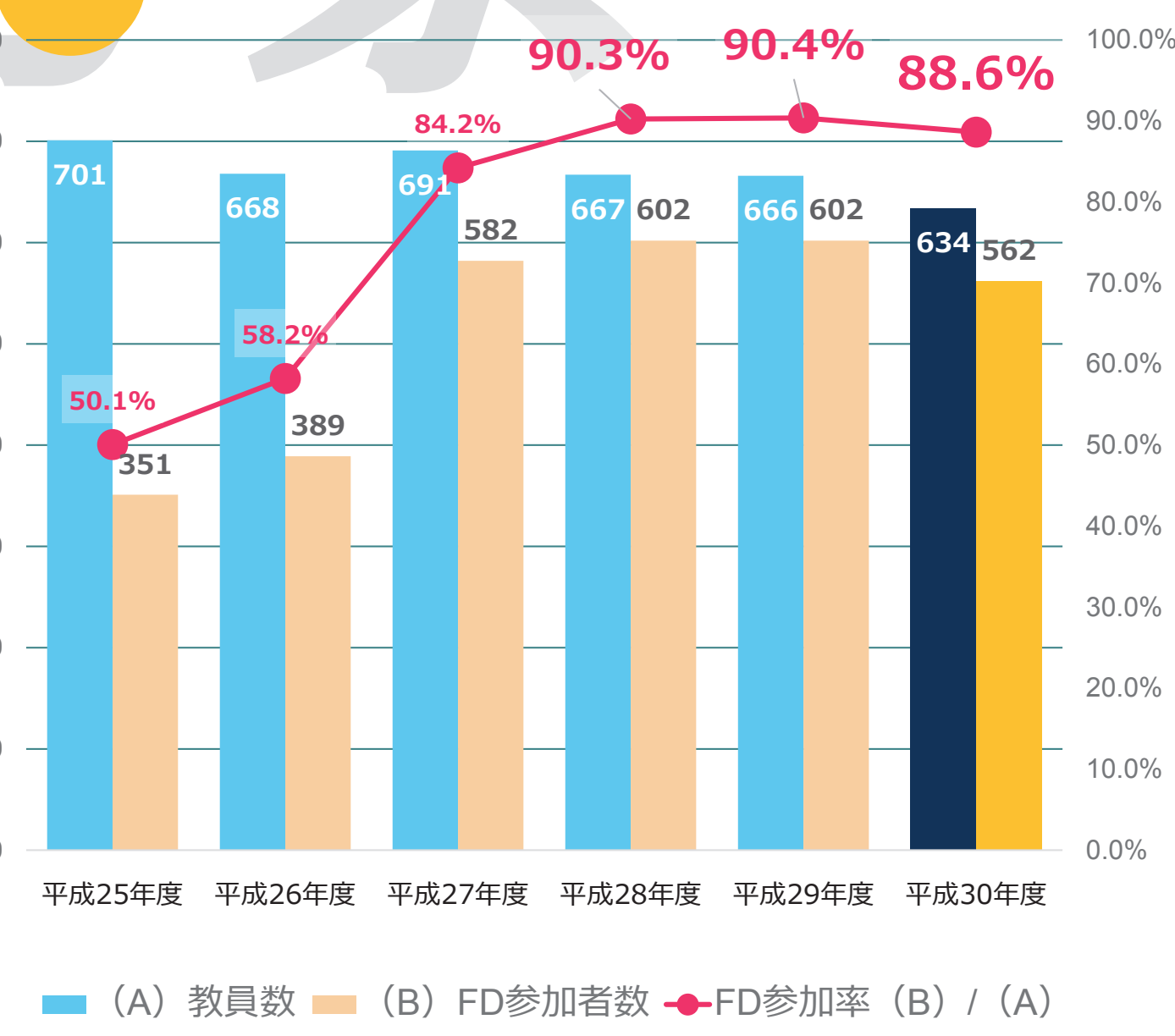
7. SIH道場を通じたAL普及の成果と課題

◆ A P事業採択前後におけるAL導入率及び教員のFD参加率の推移

AL導入率 (図1)

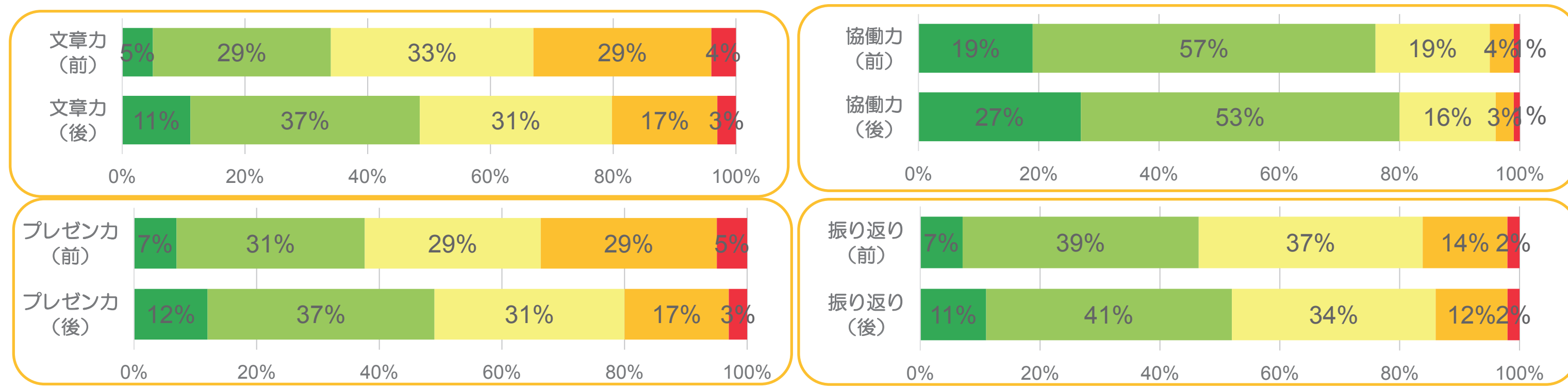


教員のFD参加率 (図2)

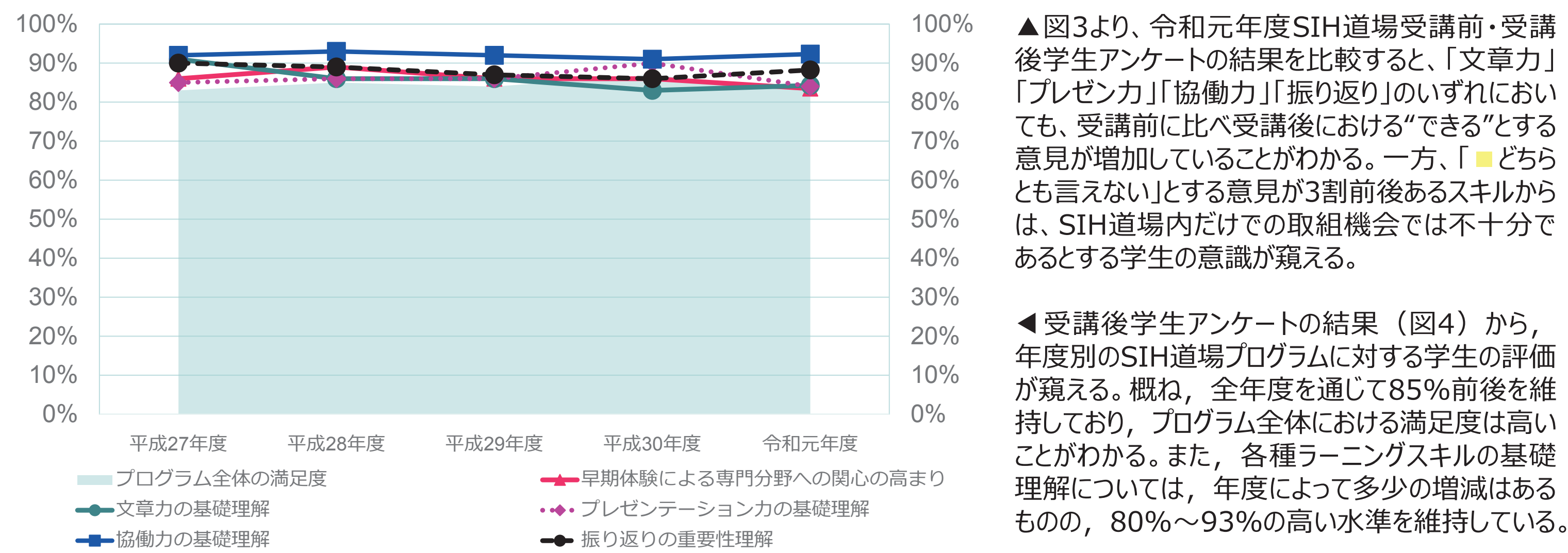


▲ A P事業に採択された平成25年度以降の本校における「AL導入率」(図1)及び「教員のFD参加率」(図2)を見てみると、事業開始年度(平成25年度)当初から段階的に割合が上昇していることがわかる。AL導入率は平成30年度において過去最高水準に達し、教員のFD参加率も平成28年度以降の90%前後の高い水準に至っている。AP事業を大学全体で組織的に取り組んだことにより、アクティブ・ラーニングが浸透し、教員のFD参加率の改善にもつながった。

◆ 令和元年度SIH道場 受講前・受講後学生アンケートの比較 (図3)



◆ SIH道場受講後学生アンケートにおける満足度の変遷 (図4)

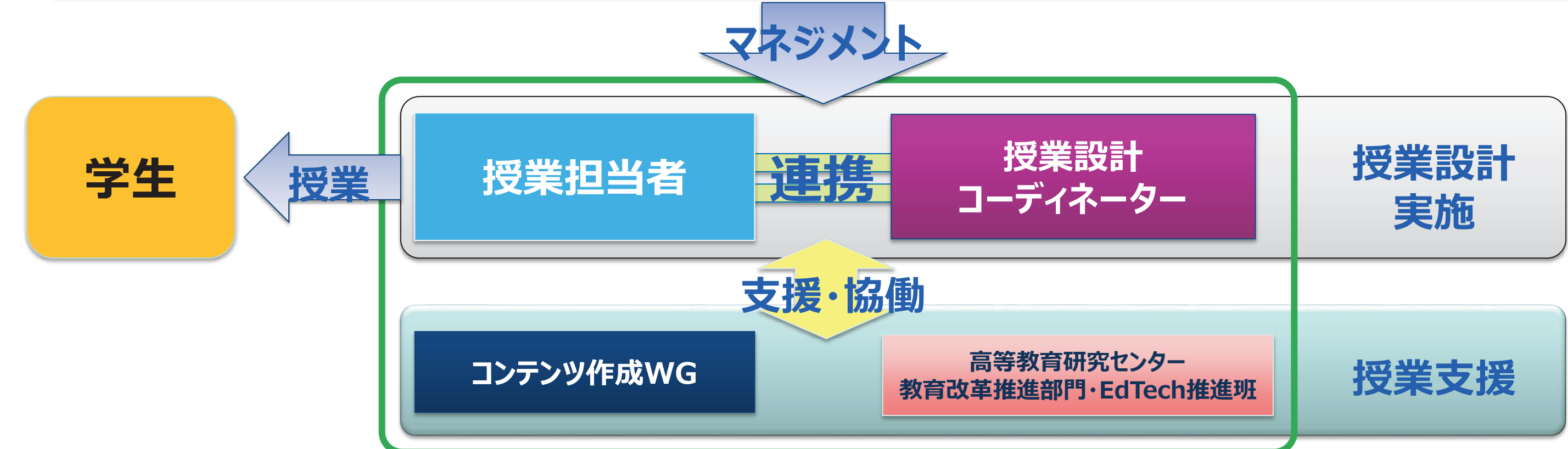


▲ 図3より、令和元年度SIH道場受講前・受講後学生アンケートの結果を比較すると、「文章力」「プレゼン力」「協働力」「振り返り」のいずれにおいても、受講前に比べ受講後における「できる」とする意見が増加していることがわかる。一方、「どちらとも言えない」とする意見が3割前後あるスキルからは、SIH道場内での取組機会では不十分であると学生の意識が窺える。

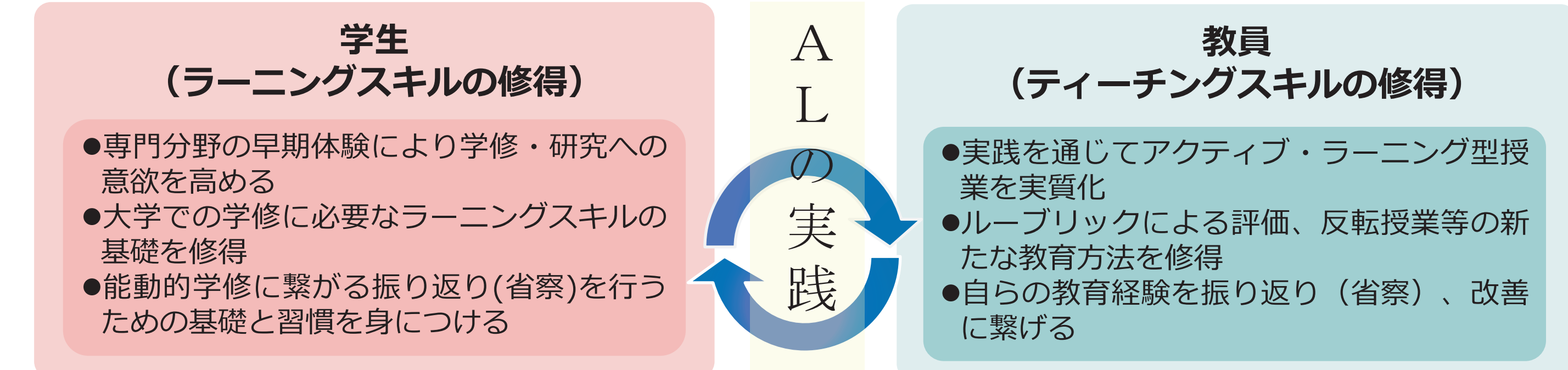
◀ 受講後学生アンケートの結果(図4)から、年度別のSIH道場プログラムに対する学生の評価が窺える。概ね、全年度を通じて85%前後を維持しており、プログラム全体における満足度は高いことがわかる。また、各種ラーニングスキルの基礎理解については、年度によって多少の増減はあるものの、80%~93%の高い水準を維持している。

2. 「SIH道場」の目的および実施体制: 学生と教員が共に学び成長する場

大学教育再生加速プログラム実施専門委員会



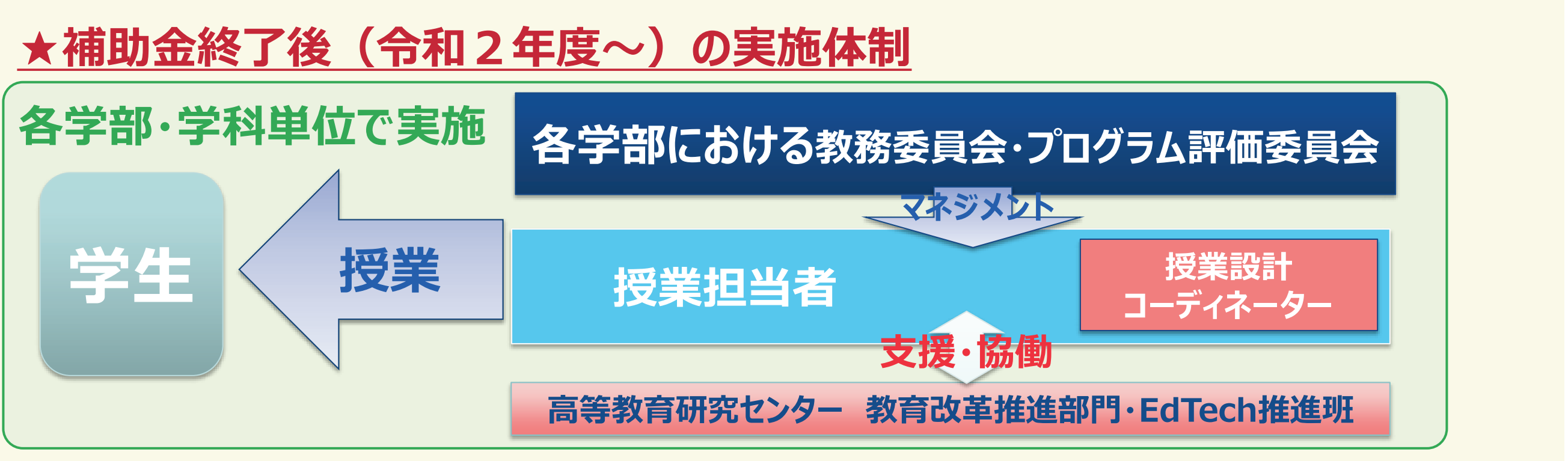
- ◆ 「大学教育再生加速プログラム実施専門委員会」を組織 (平成26年度～)
- ◆ 大学全体が連携した実施体制をとることでSIH道場の円滑な運営を実現
- ◆ 各学部の教育プログラムを設計・評価・改善を担う授業設計コーディネーターや実際の授業を担当する授業担当者を毎年度交代することにより、OJT型FDとしてより多くの教員にAL型授業を実践させる体制を実現。



3. アクティブ・ラーニング (AL) 普及に向けた取組

- ◆ ALの普及に向けた取組として、1.実践事例を知る機会を設ける、2.支援体制を整える、3.成果を示すことが重要である (佐藤他編2016)
- ◆ 全学FDやワークショップを通じて「反転授業」「ポートフォリオ」「ルーブリック評価」などの教育手法モデルを推奨
 - 学生の学習を促進する事例カードの作成・公開 (学内限定)
 - FDのeコンテンツ化・公開
 - eポートフォリオシステム「mahara」の導入・活用
 - 全授業におけるAL, LP, FC導入率の目標値を設定し、導入状況を調査
 - 授業設計ワークショップの開催
 - 全学FD「スマートフォンを活用した授業改善WS」(平成29~30年度)
- ◆ 学内外の教職員・学生と共に教育実践・成果・課題について共有
 - SIH道場振り返りシンポジウムの開催
 - 大学教育カンファレンスin徳島等、学内外での研究発表

4. 令和2年度以降のSIH道場実施体制



5. 研究の目的

AP事業最終年度を迎え、持続可能なAL実践の体制に移行するにあたり、これまでの取組から見える現状と課題を把握し、今後の支援体制の在り方について検討することを目的とする。

6. 調査の概要

◆ 令和元年度SIH道場 受講前学生アンケートにおける回答者数および回収率

項目	令和元年度
回答者数 (人)	1,146
回収率 (%)	87.0

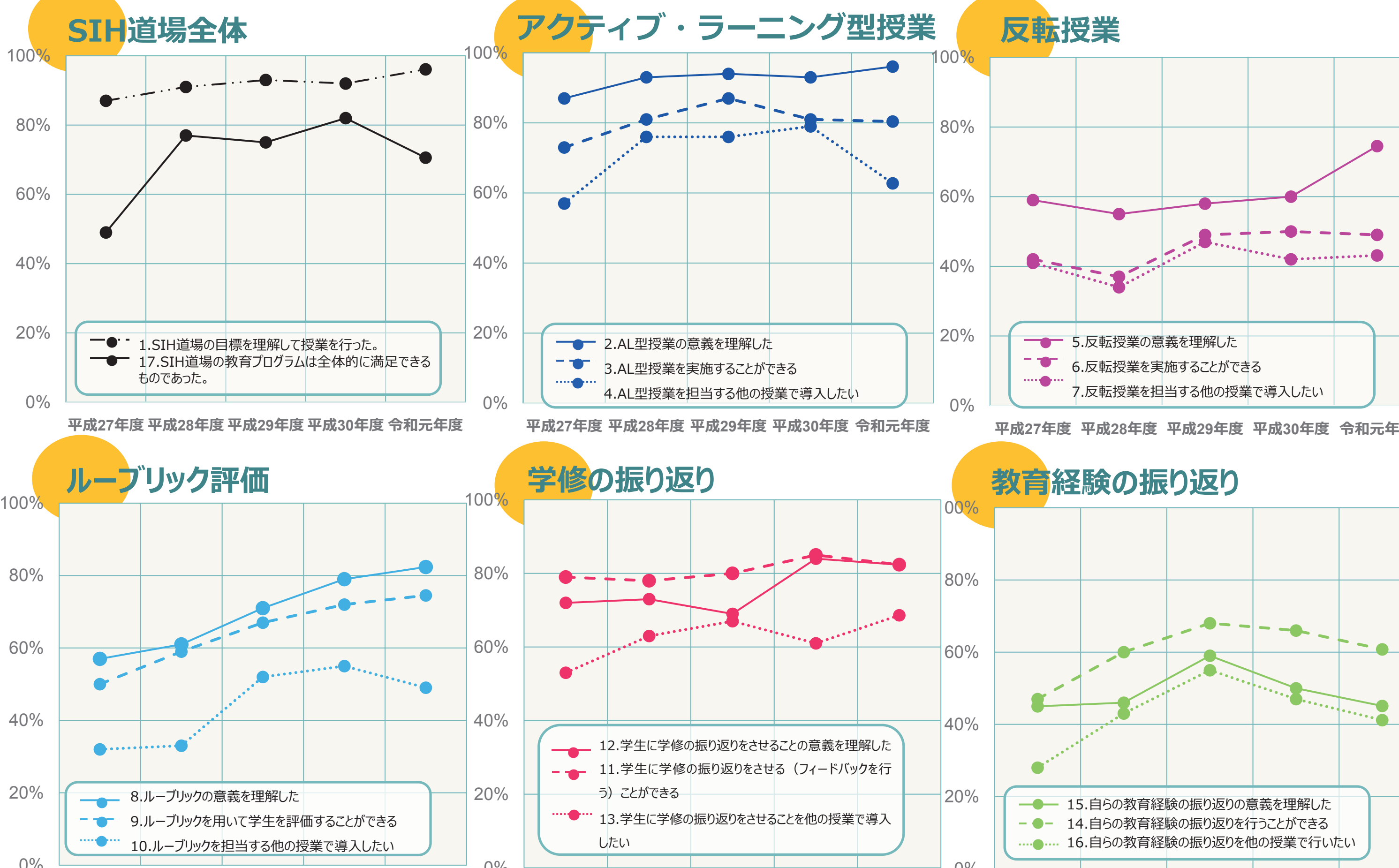
◆ SIH道場 受講後学生アンケートにおける回答者数および回収率 (年度別)

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
回答者数 (人)	1,158	1,261	1,181	964	964
回収率 (%)	87.5	94.3	89.0	72.0	73.0

◆ SIH道場 授業担当者アンケートにおける回答者数および回収率 (年度別)

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
回答者数 (人)	54	100	90	70	31
回収率 (%)	33.9	49.5	41.0	40.0	27.0

◆ SIH道場 授業担当者アンケート



▲ AL型授業の実践に関する設問において、各項「4.とても当てはまる」「3.どちらかといえば当てはまる」「2.どちらかといえば当てはまらない」「1.まったく当てはまらない」「0.担当していない」のうち、4と3を選択した件数を集計した。

▲ 「教育経験の振り返り」以外は全体的に緩やかな上昇傾向。個別に見ると、「学修の振り返り」は意義を理解・実践可能で他科目への導入に前向き、「アクティブ・ラーニング型授業」「ルーブリック評価」は意義を理解し実践可能だが、他科目への導入は消極的、「反転授業」「教育経験の振り返り」は他項目に比べ肯定的意見が3割~6割程度と少なく、意義理解はしているがまだまだ実践・他科目への導入には至っていない。授業担当者の負担が大きく、導入する優先順位が低くなりがちであることが要因と考えられる。

◆ 今後の課題

- 過去5年間の取組の中で、本学ALの普及状況や教員・学生におけるAL型授業に対する意識について明らかにすることができた。
- 本学における教育環境も大きく変化。
 - ✓ BYODの導入 (平成31年4月～)
 - ✓ 新教務システムの導入 (令和元年8月～)
- SIH道場以外の授業においても実践・導入が促進されるよう、授業設計やティーチングスキルのヒントを共有する機会をもつ。
 - ✓ 「すぐ使える90分セミナー」(月定例開催、平成31年4月～)
 - ✓ 授業設計WS・ティーチングポートフォリオ作成WS
 - ✓ 教学IRデータを活用した情報収集・共有・広報
- 佐藤浩幸・中井俊樹・小島佐恵子・城間祥子・杉谷祐美編 (2016)『高等教育シリーズ171 大学のFD Q&A』p.63-64, 玉川大学出版部
- 「学生の学習を促進する授業事例カード」http://gakunai.tokushima-u.ac.jp/univ-only/jimukyoku/gakumubu/kikakushitu_a/index.html (最終アクセス2019年11月1日)
- 川野卓二・久保田祐歌 (2015)「徳島大学の教学マネジメントとAP採択事業「SIH道場」による全学へのアクティブ・ラーニング展開の試み」『大学教育と情報』2015年度(3), pp.19-21. 私立大学情報教育協会
- 久保田祐歌・吉田博 (2016)「学修の振り返りを促進する授業設計: アクティブ・ラーニング型初年次教育プログラムの事例から」『京都大学高等教育研究』(22), pp.115-118. 京都大学高等教育研究開発推進センター
- 塩川奈々美 (2019)「全学初年次教育を通じたAL普及に向けた取組とその課題」ISPODフォーラム2019ポスター発表